

私の抑留生活

石川県 介田 實男

昭和二十(一九四五)年五月、関東軍の大動員令によって、私は第二国民兵という軍籍しかかったんですけど、召集されました。行きましたところが、ハイラルという地区の独立混成第八〇旅団通信隊に入隊しました。二十年八月九日、ソ連軍の侵攻によって空爆と戦車攻撃を受け、多くの方々が亡くなりました。私は幸いに陣地の中の通信室におりましたので命を長らえて帰ってまいりました。

二十年十月ころだったと思うんですけど、今は記憶ははっきりしませんが、ハイラル地区の前半の将兵がまずシベリアへ送られていきました。私は後半の部に属しておりましたので、十月半ばごろだったと思うんですけど、二段になった貨車に乗せられ、満州里経由で西へ西へと行きました。

バイカル湖の水で食事をいただきながら、西へ西へと汽車は走りました。

着いたところが、ソビエトで第二の炭鉱地帯と言われておりますグガバス炭田の一角にあるアンゼルカという町へ私たちは到着いたしました。ここは前にドイツ軍が捕虜になって入っておった収容所がありました。そこへ私たちは入れられました。

食事というのは、朝食は鯖の缶詰に粟のおかゆが八分目しかありません。そして、満州から持っていたみそに何も入ってないみそ汁を横へつけてありました。

昼は黒パン三五〇グラムです。人間というのは餓鬼道です、腹減ってくる。隣の人のパンが大きくないかということ、みんな見比べです。炊事場の人も考えました。パンの大きいのは隅を削って三五〇グラムにする、小さいのには上に載せて三五〇グラムにする。みんな公平に見えるだろうというので、そのくらいまで人間というのは餓

鬼道に落ちる。

それで、朝飯に粟のおかゆじゃ仕事にならんから、昼三五〇グラムのパンも一遍に食ってしまうんです。昼はなし。夜になると雑穀のちよつと固めの、これも缶詰缶に八分目しか与えられませんでした。

そうこうしているうちに、私もあまり丈夫でなかったものだから栄養失調になり、黄疸になりました。黄疸と言う病気は頭のとっぺんから足の裏まで、黄色いというよりも黄緑に近いような色になり、舌の先までその色がすごくなる。私は診療所の一室に、入院といたらおかしいけど、部屋があつて、そこへ入れてもらったんですけど、ふらふらになり、歩けないものだから、友達が私を背中によつて、そこまで連れていってくれました。

そこで三週間ほどおりましたところ、少しいい食べ物を出してくれりゃ治るんです。栄養失調やから。三週間ほどで大分元気になりました。その

時ちよつと熱が出たものですから、また二週間ほどおりました、五週間ほどその診療所の部屋に休ませてもらいました。そして元気になって、歩いて隊舎へ帰りました。

ところが、友達は私の顔を見るなり、「おつ、お前よう帰ってきたな」と言うわけです。「お前をしょつて行くときは子供をしょつて行くようなものじゃつた。軽い子供のようにやつた。今こうしてお前をおぶつていってやるけど、帰りは白木の箱に骨となつてくるかと思つた。お前、よう治つたな」と言つて、私の手をしっかりと握つてくれました。私の大事な友達です。それは長崎県の人です。名前は忘れましたが、長崎県の人でした。そして私は命が助かりました。

そうこうしているうちに部隊全隊が、炭鉱地帯でしたので炭鉱へ入れということになりました、炭鉱へ入るのに、昔から炭塵爆発とか、いろいろなことを聞いておりましたので、炭鉱へ入るよりどこか地上勤務に変えてもらえんかなと皆が言う

とったんですけど、石の粉というのはどんなに細かくしても結晶は三角だからケイハイになるんだと言うんです。石炭は全部結晶が丸いからケイハイにはならない、こういう説明なんです。だからあなた方は心配せんと石炭掘りに入ってくれ、その代わりパンを六五〇グラム、重労働やからあなた方にあげます、こういう話なんです。六五〇グラムの黒パンに騙されて、命に代えられんで炭鉱に入るとみんなが言うので、みんな地上の仕事をやめて炭鉱へ入りました。

夏になると、真っ暗なのは大体三時間、西の空が、ああ、暗くなって三時間たつと、夏は東のほうが明るくなる。冬になると逆です。三時間しか明るくない。仕事に行くときも帰ってきてても真っ暗。そういうところです。

そして、零下四〇度に下りますと、市役所のサイレンが鳴る。ワーツとサイレンが鳴るのです。そうすると、地上の仕事は全部おやすみです。四〇度以下になると、顔の出るところが全部凍傷

になります。羊の毛の帽子、防寒帽をかぶって、目だけ出している。ところが、目だけ出していると、自分の吐いた息でまつげが凍ってしまふ。まつげが凍って見えないようになります。そのくらい寒いのです。

外套も、ちょっとでも糸が切れとると、針を刺すように痛いのです。そういう所の炭鉱へ入ったために、私の部隊はあまり犠牲が出ませんでした。

それで二年間おりました、私もこんな炭鉱ばかりやと、とつても、シベリア生活でどこか変わったところへ行きたいと思って、身体検査の時ソビエトの軍医に「私はとにかく炭鉱の仕事はつらくてかなわない。見てくれ、こんなにやせて、こんな重労働はできんのか」と言うたら、「お前は何かできる。左官とか大工とかそういうものができりやそういう仕事がある」と。ところが、私は子供の時から百姓をしているために満州へ行つたんです。「私は百姓しかできんのか」と言ったら、弱ったな、今は何もありません。

そうこうしているうちに、国立農場へ五十人派遣することになったからと私を呼び出して、「お前やったか、百姓してたのは」「わしです」と言ったら「あした出発や」と。

あした出発というわけ、毛布二枚担いで、自分の食器を担いで、それで五十人がトラックに乗せられて国立農場へ行きました。

国立農場へ、五月でしたから、春の麦蒔き、麦は全部春蒔きです、ああいう寒いところは。日本は秋蒔きですけど、麦蒔きからジャガイモ蒔きから全部春蒔きです。

どうにかこうにか、農場へ行ったら六五〇グラムのパンが与えられない、重労働じゃないから。だから、何とでもして自分らの食うものを探そうと考えた。

そうしたら、ソ連人の住宅の周りにごぼうがいっぱい生えている。昔作ったんだらうね。それで、ソ連人に「お前のところのごぼうをくれんか」と言うた。「お前何する」「これは煮ると食べられる、

頼む、掘らせてくれ」。ソ連人は個人と個人やったら案外話がわかる。言葉は通じないけど、わかる。それでスコップを持って行ってはごぼうを掘った。

零下何十度に下がって、地面が二メートル凍っても、ごぼうは凍っても、春になるとまた解けて細胞が壊れません。年とともに大きくなる、それを持ってきて、そして塩味をつけ食べました。その農場で一年間仕事をさせてもらったんです。

ところが、どの国へ行っても、農業というのはあまり理屈がないものだなと思いました。給料が安い。仕事の時間が八時間労働じゃない、十時間労働。ああ、百姓というのはどの国も、共産党の国へ来ても一緒やなと思いました。

そういうことで、いろいろと仕事をやらせてもらったんですけど、とにかく私は幸せなことに、そういう炭鉱の中に入れられておったので、まあ、命を長らえることができたということです。